恋の数

澄田　康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の数

【Ｎコード】

Ｎ４８５９Ｏ

【作者名】

澄田　康美

【あらすじ】

およそ人より恋をしやすい高校生三年生の愛子は、今日も誰かに恋をする。その数は一体いくつになっているのだろうか？

（前書き）

普段は二次小説しか書かないんですけど、今回は妹の頼みからやってみました（^＿^）
恋愛小説は好きなんですけど、うまく書けているか不安です（ー＿ー）
とりあえず、適当にお楽しみくださいませ（#^＿^#）

いつもの授業。いつもの毎日。いつもの退屈。
うんざりする気すらもなくなった私は、窓際の席で適当にノートを取って、ぼんやりと外の景色を眺めた。
真っ先に視界に入ってきたのは、体育の時間だから走らされている生徒達である。こんな寒い中、哀れだなと少し思う。
で、あれって1年かな？ああ、あの体操服の色は2年だ。
真剣にどうでもいい自己確認。私は無意識に近い感覚で、一、二、三と寒空を走る二年生の数を数える。
数が二桁ぐらいになった時、私はふと、今まで自分は好きになった人の数を思い返してみた。

最初は幼稚園の頃、桜組の丸井君がなんとなく好きになっていた。
まあ小学生は学校が変わってこれは自然消滅。

次が小学1年生の夏、プールで出会った日吉君だ。彼への恋は夏だけで終わった。その時の私は多分泣いていたと思う。

その次が2年生の秋、スポーツしていた姿が印象的な田山君。確か初めて告白してみたんだけど、見事に玉砕したのを覚えている。

その次が・・・て考えてみたけど、もうきりがなさそうだから、自分の中でやめた。
昔の事を考えても仕方ない・・・今を考えるべきだ私。
で、目下考えるべき事はなんだろうかと言うと・・・

「・・・田、相田、おい、聞いてるのか相田？」

先生が、私の名を呼ぶ声が、さっきまで自分一色だった私の頭の中に入ってきた。
声が頭の中に届いた時、私はあたふたと慌てながら教科書を手に取った。

「は、はい！！」

ほぼ無意識に近い感じで、私は席をガタンと立ち上がった。
周囲から少し笑われ、先生はゴホンと咳払いをした。

「相田、よほど外で走りたかったんだな？」

先生の皮肉が教室中に広がっていき、さらにみんなが笑った。
立ち上がった私は一人、恥ずかしくなってそのまま座った。
自分の席で自分の顔が真っ赤になっていくのがわかり、私はただ顔を隠すしかなかった。
机に対して完全に寝る態勢になっている私に、隣から笑いながら声をかける奴がいた。

「おい相田、お前ってそんなに体育好きだったっけ？はははは。」

失礼な奴ね。一体誰よ？と思った私だが、声色から誰かを察する事は出来た
わかってしまった私は、顔を上げて反論しようと思ったが、さらにある事を思い出してそれを止めた。
この声・・・よりにもよってあいつじゃない。
そうだ、さっき考える事が何だったのか、その答えに近い物である。
一言で言うなら、現在進行形で私が好きな奴、吉田康夫だ。
違う男子だったら速攻で反論できるのに、こいつじゃさすがに出来ない。した瞬間に声がしどろもどろになるのが関の山だ。

私はこれでも好きな奴の前ではどうしてもぎくしゃくしてしまうタイプである。だから、今顔を上げる事は絶対に出来なかった。
本当はずっと机に突っ伏すつもりはなかったのに、あいつのせいでその授業は結局チャイムが鳴るまで机で寝る形になってしまった。
この時間が４時間目だったので、私は自分の机に弁当を広げて、昼食を取る事にした。
で、いつも私の机に来る友人３人が、さっきの騒動を当然掘り返してきた。

「ねえ愛子。さっきのって受け狙いじゃないわよね？」

先手は一番付き合いの長い恵美。

「そんな訳ないでしょう？無意識よ無意識。」

「えぇ？無意識であんな事出来る訳ないでしょう？絶対嘘よ～。」

次にいかにもな感じで言ってきたのは、その次に付き合いの長い綾子。

「なんでこんな嘘言うのよ。本当よ。」

「さすが愛子ね。無意識でもおいしい所持って行くなんて。見習いたいなぁそんな所。」

そして最後でおどけた感じに言ったのは、この高校で知り合った麻耶。

「何が見習いたいよ。あれじゃただの笑い者じゃない。全然おいしくないわ。」

「で～も、愛しの康夫君は振り向いてたじゃ・・・」

綾子の言った言葉に、私は少し我を忘れて綾子の口を塞ぎに掛かった。

「ちょっと！！学校でその事言わないでよ！！」

手で思いっきり押さえたので、綾子はもがもがと苦しそうな様子を見せていた。

恵美が隣から「まあまあ」と私をなだめ、私はそっと綾子から手をどけた。

「愛子～、そんな必死になってたら余計目立つわよ？」

麻耶の冗談に聞こえない冗談が、私の中にちょっとしたわだかまりを作っていた。

「でも・・・もし聞こえてたらって思ったら、怖くなったのよ・・・」

「周り見なさいよ。愛しの康夫君はどこにもいないよ？」

綾子が言ったとおり、教室は人もまばらで、彼どころかほとんどの男子がいなかった。

立ち上がって確認して、それがわかった私は、ほっと胸を撫で下ろしてまた椅子に座った。

「よかったぁ・・・」

露骨すぎる安心に、友人三人はむしろ呆れた様子を見せてきた。

「これじゃ、進展は望めそうにないわね～。」

「愛子じゃやっぱり無理なのかなぁ？」

「仕方ないわよね。本人は好きなだけなんだからさ。それ以上は望まないって奴？」

三人の意見にむっとなった私だが、反論の余地はないに等しかった。
私はただ黙っておかずに箸を伸ばしていた。
確かにこのままだなんて、私だって嫌だ。だけど私には、後一歩の勇気が皮肉にもなかった。
告白は男子がする物。なんて考えがあるけど、女子が好きになったのなら、男子の告白を待つなんて望めない。
好きにさせるとか、何となくその気にさせるとか、時間があればいいだろうけど、生憎高校三年生の私にそんな時間なんてない。
だから、常道から外れた告白、つまり女子からの告白も、このままではずるずると出来なくなってしまう。
受験とかでこの先忙しくなるのはわかっている。だからこそ、ここで女を見せるべきなんだ。
しかし、いざそう思い立っても、何も出来ないこの私。じっとうつむく他にない。
その様子を察してくれるのも、この三人の特技？である。

「愛子～、口に出さなくてもわかるわよ～、あなたの願いは。」

「もう全身から出てるからねぇ。伝えたい～って奴が。」

「だけど、やっぱり出来ないって顔になってるね。」

ここまで的確に言われると、うつむいているのも馬鹿らしくなってきた。
私はとりあえず笑顔になって、顔を上げて三人を見た。笑顔と言っても、やや引きつった感じの笑顔である。

「言わせておけばぁ・・・好き勝手言ってくれるわねぇ・・・」

「え～？私達は事実を言ったまでだよね～？」

「うんうん。」

二人してうなずく姿に、私はますますイラッときた。

「人の色恋の事ばかり言ってるけど、あんた達は一体どうなのよ！？」

私の荒げた声は、少し教室に響いたが、幸い人は少ないのでこっちに振り向いてくる奴も少なかった。
そして私の見事なカウンターパンチは、三人に見事命中・・・したかと思った。
しかし、三人が不敵な笑みを見せた瞬間、私のパンチはどうやら空を切ったのがわかった。

「言わなかったっけ？私は当の昔に彼氏がいますよ～だ。」

「私は最近ね。この前の彼氏とは別れちゃったけど、今の彼氏の方が格好いいからモーマンタイ。」

「私は絶賛恋愛中～♪違う学校でもいいもんね♪」

どうやら私のパンチは、空を切ったどころか全部カウンターされたようである。
三人分のカウンターを喰らった私は、そのまま机に向かってダウンしていった。
レファリーもカウントもない状況。当然誰も起こす人はいない。
私の事を気遣ってくれたのか、友達三人はしばらく喋くった後で、どこへなりと行ってしまったようである。
それでも、私は起き上がって立ち上がる力は残ってなかった。今は椅子から動きたくない・・・真剣に・・・
せっかくの昼休みがこんな形で潰れるのはちょっと嫌だけど、下手に動いて倒れたりでは余計敵わない。だったら、このままが一番である。
さっきのダメージがちょっと回復してきた私は、机の上に書いてある文字に目を向けた。
友達が書いた奴とか、この席に座ってた奴とか、色々と書いてある。
消すのも面倒なのでほったらかした落書き。それらに適当に目を向けていると・・・一つの文字が、今の私にドンピシャリと止まった。
かすんでいて見にくかったけど、私はそれをどうにか読解してみた。

「え～っと・・・好きなままでは駄目・・・恋は水物・・・好きなら言葉にすべし・・・行動で示せ・・・」

まるで今の私に言われているような文字列に、私の心が・・・パアァっと晴れていく音がした。
そうだ・・・何もしないんじゃ始まらない・・・何かすべきよ、私！！
そう思い立った私は、とりあえずあいつに近づく理由を考えてみた。
クラス委員は・・・私は図書委員であいつは体育委員・・・これは無理。
期末テストは・・・まだ遠い。一緒に勉強は無理。
成績は・・・確か私と点数は似たり寄ったりで、教える教えられるってのは多分ない。
後は・・・あれ？もうない？リアルでない？
その答えに行き着いた私は、自分の頭をほぼ無意識にがりがりと掻いていた。
まずいまずいまずいまずいぃ～！！これじゃあいつに話しかけるきっかけすらないじゃない！！
一人でひたすらに悩む私。こうなったら・・・きっかけを作るしかない！！
まず手始めに、あいつの机の上に私のシャーペンを置く。これは先手。
次に、あいつの机の中に私のプリントを入れる。これが本命に近い。
そしてトドメは、机の下に私のノートを置いておく。ぶっちゃけ気づかない奴はいないはず！！
よし、これだけしてれば・・・多分きっかけぐらいは作れる！！
思い立った私は早速立ち上がり、いい感じに人のいない教室で裏工作を始めた。
準備が完了し、私は何食わぬ顔で自分の席へと戻っていった。
昼休みが終わりそうな頃合で、ようやくあいつが教室に戻ってきた。

来た！！さあ、早く座りなさい！！早く私の奴に気づくのよ！！
と心で強く願う私。
しかし、きっかけは全部予想外の形で潰されていった。
まず机の上にあるシャーペンだが、あいつの友達がふざけて持ち去って行った。これじゃ意味がない・・・そいつに声掛けても意味ないし・・・
その次の机の中のプリントだが、あいつがいきなり無造作に机の中を弄繰り回し、何を思ったのか教科書等を今更突っ込んだ。これではプリントは間違いなくくしゃくしゃだ。
そしてトドメのノートだが、あいつの足癖によってノートは前方に飛んでいき、一番前の奴の席に行ってしまった。そして蹴った事に気づいていないあいつ。それぐらい気づいてよ！！
作戦が全て失敗したとわかった私。それ以上の手は打ち様がないとわかった私は、また机にダウンしていった・・・

放課後、机にひたすら突っ伏したままの私は、誰一人として気にする事もなく、みんなぞろぞろと帰っていった。
先生の「閉めて帰れよ～」って声ぐらいは聞いていた私は、それだけ覚えておいて、後は突っ伏していた。
このまま机と同化でもしてしまうのではないだろうか・・・なんて事を思うぐらいの私。
いっその事、同化してしまえば楽になるのではないだろうか？
机と一緒になれば、こんな色恋沙汰で悩む事なんてないだろう。こんなに苦しむ事もないだろう。

だけど、無感情のまま黙々といる人生。それを想像した時、私はやっぱり人間のままがいいと自分で首を振った。
駄目だ・・・こんな事考えてても仕方ないや・・・そろそろ帰ろう・・・帰って寝よう・・・
私は鉛ぐらいに重くなった腰を上げて、教室から出ようかと席から立ち上がった。
その時であった。誰もいなくなった教室に、誰かが入ってきたのだ。入ってきた音を確認して、それが誰だろうかと目を向けると・・・あいつがいた。
あいつは、私がいる事を不思議そうに見てきた。そして、軽そうな口を開けてきた。

「お、相田じゃねぇか。なんでまだ教室にいるんだ？ずっと寝てたのかよ？」

あいつのいつもの笑顔と冗談。私が好きな笑顔と冗談。
私は精一杯の勇気を振り絞って、どうにか受け答えぐらいはした。

「そ、そうよ。ずっと寝てたのよ。そ、それより、吉田はなんで帰ってきたのよ？」

動揺してしどろもどろになる私の声。あいつがそれを不思議がることはなかった。

「なんでって・・・単純に忘れ物だよ。それ以外の理由で、放課後の教室になんて来ねぇよ。」

まあ当然の主張である。
私は「そう」と軽く返事をして、その場を去ろうかどうか悩んだ。
しかし、理由もないのに今更教室にずっといるってのはいくらなん

でもおかしいだろう。
このままでは帰るしかない私。それ以外の選択肢なんてないから仕方ない。
とぼとぼと帰路につこうとしたその時、あいつが「あ」という声を上げてきた。
それが気になったのであいつに目を向けると、あいつが・・・くしゃくしゃになった私のプリントを手に持っていたのだ。
くしゃくしゃと言っても、名前ぐらいは読める状態であった模様。
あいつはそのプリントを持ったまま、私に駆け寄ってきた。

「おい相田、お前のプリントが俺の机の中に入ってたぜ。何で入ってたんだろうな？お前、前にこの席だったのか？」

相田の疑問に答えるには・・・私の作戦を告げるしか方法はなかった。
しかし、こんな心が浮ついた状態で・・・そんな事言える訳がなかった。
私の頭がひねり出した答えは・・・あまりに無理があった。

「し、知らないわよ・・・たまたま紛れたんじゃないの？」

いやいや、それはおかしいよ私！！
と自分内で思わず突っ込んでしまった私。
もちろん、それであいつは納得するはずがなかった。

「えー？俺の机に、お前のが紛れ込むかぁ？どう考えてもおかしいだろ？もっと違う理由があるだろ？」

あいつからの言葉が、矢のように私の心に刺さってくる。
このまま真相を言わずじまいだったら・・・多分私は、この事をず

っと引きずる。
だったら・・・もうなるようになれだ！！

「・・・が入れたのよ。」

あれれ？なんでこんなに小さい声になってるの私？
これでも思いっきり言ったつもりの私。だけどそれは実際の大きさとはむしろ半比例してしまったようだ。
当然こんな声があいつに聞こえる訳がない。

「は？何て言ったんだよ？聞こえねぇよ。」

あいつがそう言ってきた瞬間・・・私は・・・自分の中の全てを吹っ切って・・・言ったんだ。

「だから！！あんたが好きだから私が入れたのよぉ！！！」

言った・・・言ってしまった・・・それもまあ大きな声で。
放課後だから誰もいないだろうけど、それでもあまりに大きな声だった。
私は二つの恥ずかしさから、顔を真っ赤にして、じっとうつむいてしまった。
どうしよう・・・いや、言ってしまった以上は全部手遅れである。
そう・・・後はあいつがはいかいいえかのどちらを言うか・・・もしくは待ってくれとかって返事を待つしかない。
どの答えが飛んでくるか待っていると・・・あいつは、言ったんだ。
確かにそう言ったんだ。

「・・・俺なんかでいいのか？」

え？これって・・・ＯＫって意味？そうなの？そうだよね？間違いないよね！？
私は必死に顔を上げて、あいつの顔を見上げた。身長差があるからそういう形になる。

あいつは自分の頭をぽりぽりと掻いて、照れくさそうな様子で私を見ていた。多分私と同じぐらい・・・顔を真っ赤にして。
それだけで十分だった。あいつは・・・私の彼になってくれた。それは十分すぎる程わかった。
私はぎゅっと、彼を抱いた。彼も私を抱き返してくれた。
私の恋の数は今、三桁になっている事を、その時の私は知る由もなかった。
それからの私の恋の数が、そのカウントを止めたのは、また別の話。

恋の数　あなたの中で続く・・・

（後書き）

後書き

あ～あ・・・やっちまったい・・・・（´Д`）

妹の頼みとはいえ・・・やっぱり恋愛小説は難しい・・・結局滅茶苦茶はしょってしまったし・・・

でもまあ、初めてって事で大目に見てくださいな（^＿^）

スペシャルサンクス

相田　愛子　様

丸井　庄治　様

日吉　輝夫　様

田山　雄三　様

吉田　康夫　様

谷川　恵美　様

山伏　綾子　様

立花　麻耶　様

学校の先生

わしの妹

では、このような粗末な駄文をお読みいただき、真にありがとうございました（#^__^#）

ＢＹ　澄田　康美

ＰＳ、リクエストしてくれたらまた書いてみます。ではまた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4859o/

恋の数

2010年10月24日08時33分発行